

短歌における語順について 服部崇

「短歌研究」二〇二一年七月号の特集「二〇二一『短歌リアリズム』の更新」を興味深く読んだ。歌会の評で「語順を変えては」と言われることがある。確かに語順を変えると歌の印象ががらっと変わることがある。しかし、今回、山田航による、短歌における語順とリアリティの関係性に注目した論には、はっとさせられた。

同特集を企画立案した山田は、平田オリザの「現代口語演劇」論を参照し、話し言葉の重要なファクターが「語順」であるとは指摘する。そして、短歌においては、特に、「口語短歌」においては、語順が「リアリズムの更新」（穂村弘）を生み出す可能性があることを指摘する。山田が引用している「短歌研究」二〇一九年五月号「作品季評」における穂村弘の評はわかりやすい。

・真夜中のバドミントンが 月が暗いせいではないね つづかないのは
宇都宮敦『ピクニック』

右の一首について、穂村は、次のように述べている。

八〇年代、九〇年代の口語では、「月が暗いせいではないね」が最初に来て「真夜中のバドミントンが つづかないのは」という語順になるはずなんだ。僕らは明らかにそう書いていたと思う。宇都宮さんも当然それを知っていると思うけれども、配列を変えたのです。彼の感覚ではこちらがリアルなのだということ

とだと思う。それを見たときはつきりそれが、更新しようということなんだ、口語でもよりリアルな空気感ほこちだということ呈示だと思った。

（「短歌研究」二〇二一年七月号七九頁より再引用）
宇都宮の短歌における語順が穂村がいうように「こちらがリアルなのだ」という感覚に根差すものであるのであれば、確かにそこには「リアリズムの更新」があるだろう。

山田は、『何があるか』（WHAT）のリアリティだけではなく、『どう語るか』（HOW）のリアリティが出現してきている」と書く（同七九頁）。この点に関連して、同特集の対談において永井祐が、かつて斉藤斎藤が「私」の視点（カメラアイ）をシューティングゲームのFPS（ファースト・パーソン・シューター）とTPS（サード・パーソン・シューター）の違いを例に説明したところ（斉藤斎藤「生きるは人生と違う」（「短歌ヴァーサス」第十一号、二〇〇七年）に改めて言及していることが注目される。また、同特集の別の対談において吉田恭大は、ゼロ年代のリアリティがFPS的な視点に振れていたのに対し、今はTPS的なリアリズムへの志向が強まっていると指摘している。これらについてはさらなる検証が必要のように思われる。

最後に、同特集において取り上げられていた永井と吉田の歌を一首ずつ引いておく。

・よれよれにジャケツトがなるジャケツトでジャケツトでしない
ことをするから
永井祐『広い世界と2や8や7』

・駅前の道に溢れる宗教のひとびととあふれだす宗教

吉田恭大『光と私語』